

大賞

友よ……

三郎

実にいい葬式だった。祭壇には一斗樽と競馬新聞に会社四季報。読経の代わりに一人娘のピアノの演奏でモーツアルトのレクイエム。

娘婿である羽織袴の碧い目が参会者にかっぱ巻き、干瓢巻きを勧める。「コレ、父上ノ愛シタ行徳ノ海苔デ巻イタ。父上、私達ノ結婚、『バカ野郎!』、怒鳴ッタ。デモ、息引き取ルトキ、手、握ッテクレタ」

そのニューヨークの寿司職人に友は嘆いたものだ。「湯呑みの魚偏なんざ、一つも読めねえ。シャリはロボットに握らせてネタを載せるだけや。『部長ハ大トロ、課長ハイイナリ寿司デ係長ハヒラメ』と、どこで仕入れたのか日本語でギャグ飛ばしやがって」。店を三軒構えていて、それがまた友の癪の種だった。「ビジネススクールを首席で卒業した拝金主義者よ」

『葉隠れ』を読んだという碧い眼が海苔巻きにウンチクを垂れる。「江戸前ノ海苔デ忍者ノヨウニ巻ク、コレ極意ネ」フィナーレで碧い眼は神妙な顔つきでこう挨拶を述べた。「ミナサン、アリガトウ。父上ハイイ人デゴザイマシタ」

——私は葬式であんなに美味しい海苔巻きを食べたことがない。